

コラム

正直であれ

高木兼寛が生涯にわたって大切にした徳目に「正直」というのがあった。子供や孫たちにも、ことある毎に、正直であれ、嘘をついてはいけない、人をだましてはいけない、とまるでお経を唱えるように諭したという。

兼寛のこの正直であれという教訓は、かれの幼少のころの忘れがたい苦い体験からきている。彼は幼児から漢学の塾に通っていたが、ある日、遊びが面白くなって、つい塾を休んでしまったことがあった。彼はそれを内緒にして、親には塾にいったことにしていたが、悪いことに塾の先生がそのことをすっかり告げたために、父からきつい折檻をうけた。そしてその折檻の痕はながく残った。

その顛末はこのようであったという（兼寛晩年の講演より）。

「私は武士の子で、大きくなれば武士になるべき筋合いのものでした。幼少の折から『武士は正直でなければならぬ』と教えられていましたが、ある時、偽りを言いました。すると父は、『かように嘘を言うものは、生かしておいても武士になることはできぬ。今日かぎり打ち殺してしまうから、さよう心得ろ』といって、割薪で臀部をひどく打ちました。私が痛さに堪えかねて悲鳴をあげると、母がきて、一緒に詫びてくれましたので、ようやく父の怒りも解けました。

私の臀部には、そのときの痕がながく残りましたが、母はそれを見るたびに、『お前はなぜ嘘を言ったか。人が見ていないからと思って悪事をして、神仏はそばからちゃんと眺めておられるから、始終表も裏も同じように努めねばならぬ』と涙を流して訓戒しまし

た。

私の今日あるは、この父母の一举に原因があるといって差し支えありません」と。

筆者には、兼寛の人生にたいする基本姿勢は、この時にさだまったように思われる。「正直」をふくめて、すべての徳目を守るには、その背景にそれを支える神仏のはたらきが必要であるという姿勢もこの時にさだまったのである。

彼は明治36年ころ、自ら校長をつとめる東京慈恵医院医学専門学校で、彼独自の人間教育をはじめた。それは、それまでの経験から、医学教育には知識の教育だけでは不十分であり、必ずしも良医を育てることができないことを覚ったためであった。その独自の人間教育というのは、一つは入学試験に「品性試験」なるものを加えたことであり、もう一つは在学生に「明徳会」なる精神修養の講座を設けたことであった。「品性試験」では、受験生に、どんな理想をもっているかとか、どんな宗教を信じているか、などを口頭試問して、とくに高い理想をもたない者や、宗教に無関心な粗野な人物は遠慮なく落第させたといわれる。

一方の「明徳会」では、名僧高德を招いて講義をしていただき、それを全員で拝聴させた。そもそも医師には、患者の苦しみ、痛みに共感し、これをいたわり、慰める感性が必要であるが、兼寛は、この「明徳会」によってその感性を涵養するとともに、それが神仏の慈悲（愛）に根ざしていることを教えたかったものと思われる。

兼寛自身、英国留学時には毎週教会に通うほどキリスト教に接近し、また明徳会を開くころは仏教に傾倒し、さらに晩年にはこんどは神道に心酔していったが、それは、幼少のおり母から「神仏はいつもそばから眺めておられる」と訓戒されたその神仏のすがたを求める遍歴の旅だったのではなかろうか。